

2023年8月の総評に代えて

○林 桂○

●ビスコ●（愛知県 49歳）

自分の名前を忘れても  
小さな折り鶴を  
美しく折る祖母

【評】祖母は自分の名前を忘れるレベルの認知症となってしまったのだろう。でも、手で覚えた折り鶴は忘れずに美しく折る。体で覚えたものの方がより本質的な記憶なのだろう。

●青野陽●（熊本県 20歳）

豆電球 薄い白檀 めいぐるみ  
実家の夜の眠気はさみしい

【評】帰省して見る実家の風景。豆電球も白檀もめいぐるみも、親しく懐かしいものなのに、一端離れた者の眼には違った色彩が差す。「夜の眠気はさみしい」がそれをよく伝えている。

● 香取小春 ● (宮崎県 30歳)

パラレルの私にかさご釣りの才能

【評】現在只今の自分は持ち合わせていないが、パラレルワールドの自分はかさご釣りの才能がある。二人の自分の違いは、もっと言うべきものがあるに違いないが、「かさご釣り」に象徴させている面白さがある。

● 大嶋 碧月 ● (兵庫県 23歳)

兄嫁の自転車借りて走る故郷

【評】これも帰省の一コマだろう。久しぶりの故郷の様子を見て回るのに、兄嫁の自転車を借りる。兄嫁の日常の交通手段もこれで知れる。兄や父母は普段の移動に車を使っているのだろうか。

● 天野 若花 ● (福岡県 37歳)

羽ばたきを繰り返しては  
折り鶴に折目正しく穴は開いてく

【評】折り鶴を千羽鶴に束ねてゆくさまを描いている。「羽ばたきを繰り返しては」

の眼の効き具合に惹かれる。

●有野 水都●（東京都 15歳）

桜の実都に水路の広がって

【評】都の風景の根本には、張り巡らされた水路がある。田舎にはない風景だ。「都」の本質を「水路」で言い止めている。

●貴田 雄介●（熊本県 36歳）

幼子は水をこぼしてばかりいる  
地球は水の惑星だから

【評】こぼすのは幼児の幼さの表現でもある。とくに水はこぼしやすいだろう。その理由を「地球は水の惑星だから」と、とんでもなく遠くから探してくる。しかし、そのことで水の本質的なものを間違いなく想起させる。幼児の水をこぼす幸を思う。

●上村りん●（奈良県 21歳）

読みかけの新聞に  
おしりの端っこと

ふかふかのしっぽを添える

【評】新聞を読んで、猫との付き合いにかまけていると、猫は自己ピール行動に入る。読みかけの新聞の端に乗り、尻尾を新聞の上に出す。何とも迷惑だが、愛猫家は新聞を読むのを中断せざるを得ないだろう。

●高砂 明日香●（東京都 20歳）

信号を諦める距離がおんなじで  
走らなくてもいいんだって思う

【評】点滅をする青信号。走れば渡れるかもしれない微妙な距離。渡るのを諦める判断をする距離が一緒にいる人と同じ。合わせて渡りきらなければと思っていた分、その判断に自分と同じ資質をみて共感する。

●砺波●（広島県 19歳）

大学に落ちてもいちごじゃむは  
おいしいし

天気予報はやってる

【評】ひたむきに大学受験に取り組んでいたころは、失敗すればこの世の終わりのような思いでいたことだろう。ある意味、失敗して新しい世界が開かれたともいえる。

● 花野 木春 ● (東京都 29歳)

ぶらんこを高く高くと漕いでいた  
すみれのように美しいころ

【評】「すみれのように美しいころ」は、夕暮れ時の時間をさすのか、汚れない幼いころをさすのか、二つの可能性がありそうだ。私は、後者と読んだ。「すみれ」の比喩が美しい。

● 櫻川 佳子 ● (愛媛県 35歳)

行くなとは  
言わない祖母の優しさが  
喉に刺さって  
取れなくて、盆

【評】「盆」からすれば、既に祖母は亡くなっているのだろう。進学か就職で、家を離れる孫に一番寂しさを募らせていたのは祖母だったろう。何も言わずに送りだ

してくれた祖母の優しさが、今でも心に残ってままである。「喉に刺さって」の比喩が効いている。

●平 春来里●（岐阜県 25歳）

露天風呂で二人きり  
知らないおばさんと  
トカゲを見ていた

【評】山深い秘湯の露天風呂の趣である。たまたま居合わせた人と話すでもない。しかし、風呂の岩場か囲いの上に出て動かないトカゲから眼を離せなくなってしばし固まってしまったのである。トカゲはトカゲで視線を感じて動かない。旅の深い思い出で残るのは、案外こんな一瞬であろうか。